

1609 Radionuclide imaging (RN) と超音波による肝臓癌の診断

湯本泰弘、徳山勝之、神野健二、山本 博、本郷俊樹、森田 稔、石光鉄三郎、丸山 久（四国がんセンター内・放） 三谷 健（岡大一内）

肝臓癌の検出とその質的診断のために、各検査法の特徴をいかし相補的に診断率の向上をはかる複合画像診断を行った。RNは日立メデイコ社製Gamma Viewシンチカメラと連結したVaricam V-77でデーター処理を行った。一部の ^{99m}Tc -phytateによる肝シンチフォトで小欠損像を示す症例に関しては ^{67}Ga -citrateスキャン、RCTを行った。RCTは回転椅子を用いた。RNおよび超音波(US)の検査をうけ腹腔鏡検査、手術又は剖検によって確定診断をした。HCC11例、HCC LC22例、転移性肝癌25例、肝内胆管癌1例、肝腫瘍5例、肝嚢胞3例、胆道拡張(閉塞性)4例、慢性肝炎38例、肝硬変59例、その他の消化器癌15例、健常例15例の198例である。成績および結論：肝内占拠性病変(SOL)62例のうちRNによってSOL(+)であったもの57例、SOL(+)3例、(-)2例に対してUSでは1例を除き61例にSOLを検出し得た、Sensitivity 93.5%のRNに対してUSは98%と高率であった。USでSOL(-)の右横隔膜直下の1例をRNで検出した。一方CH、LCなど133例ではRNで41例と偽陽性例が多いが、USでは2例であった。両者併用により検出率は向上した。

1610 肝腫瘍性病変における ^{99m}Tc -HIDPシンチグラフィの臨床的意義

安永忠正、広田嘉久、土亀直俊、上野助義
高橋睦正（熊本大、放）

肝・胆道シンチグラム製剤である ^{99m}Tc -HIDAの肝描出はビリルビン産生能を有する肝実質細胞に摂取されることによる。このことは、胆汁色素の沈着を認める分化型の肝腫瘍性病変は、腫瘍陽性画像製剤となりうることを示唆している。

今回、肝外転移巣に陽性像を呈した2症例を含めた肝細胞癌の10例及び1例のfocal nodular hyperplasiaについて ^{99m}Tc -phytateによる肝シンチ及び血管造影と対比して肝腫瘍性病変における肝・胆道シンチ製剤の臨床的意義について検討した。

1611 ^{99m}Tc -MAA 動注法による肝疾患の診断

古井滋、吉川宏起、土屋一洋、大友邦、町田徹、八代直文、西川潤一、町田喜久雄、飯尾正宏、（東大、放）

臨床検査から肝腫瘍が疑われて血管造影を行った15症例を対象に、血管造影を施行後固有肝動脈または総肝動脈にカテーテルを置いて、 ^{99m}Tc -MAA (10~20 mCi)を動注し、 γ カメラ (Searle LFOV)を用いて肝前面像、右前斜位像のシンチグラム検査を行った。対象は肝細胞癌、転移性肝腫瘍、肝硬変などの疾患の症例を含んでいる。これらの症例で得られた ^{99m}Tc -MAAによる肝シンチグラム像と ^{99m}Tc -フチン酸による通常の肝シンチグラム像、血管造影所見などとの対比を行った。また ^{99m}Tc -MAAによる肝シンチグラムで部分的な集積が見られた症例ではシンチバック1200を用いて同部の ^{99m}Tc -MAAの集積率の測定を行った。

肝細胞癌では ^{99m}Tc -MAAによるシンチグラムで腫瘍に一致して強い集積が見られ、特に血管造影で見落とすことのある左葉の腫瘍の検出に有効な症例も見られた。転移性肝腫瘍では ^{99m}Tc -MAAによるシンチグラムで様々なパターンの集積が見られた。肝硬変や肝炎では他の検査で肝腫瘍が否定された症例でも ^{99m}Tc -MAAの部分的な集積を認めることがあった。

1612 ^{99m}Tc -MAA 動注法による肝細胞癌の診断

動静脈短絡の診断を中心として

吉川宏起、古井 滋、土屋一洋、大友 邦、町田 徹、八代直文、西川潤一、飯尾正宏、（東大 放）

血管造影及び他の臨床検査から肝細胞癌と診断された15症例を対象に検討を行った。これらの症例では血管造影を施行後、固有肝動脈または総肝動脈にカテーテルを置いて ^{99m}Tc -MAA (10~20 mCi)の動注を行い、 γ カメラ (Searle LFOV)を使用して動注直後のdynamic studyとその後の肝前面像、肝右前斜位像、肺前面像のstatic studyを行っている。Static studyで得られた前面像のimageをシンチバック1200に収録し ^{99m}Tc -MAAの肝および肺の集積率の測定を行った。

^{99m}Tc -MAAの肺動脈動注法によるシンチグラムは肝細胞癌の静脈内進展に伴う動静脈短絡の検出や短絡率の測定に有効であり、最近普及した肝細胞癌の人工塞栓術の適応や塞栓物質の選択にも有用な示唆を与えると考えられた。